

## 第 39 回学習会

69 年目の 8 月、あらためて「平和と戦争、そして憲法」を考える

「宮前九条の会」事務局長 若原弘道

### 1. 川柳に見る最近の世相（毎日新聞の万能川柳から）

- ・戦争にならにように投票す（2013 年度最優秀作）
- ・戦争に向けてませんからうちの孫（2014 年 7 月 8 日）
- ・戦争はクニが始めてヒトが死ぬ（2014 年 7 月 14 日）
- ・世界中わが憲法と同じなら（2014 年 7 月 15 日）
- ・空襲で目が覚める日が来ぬように（同上）
- ・日本兵なんて言葉に現実味（2014 年 7 月 25 日）

<参考>

7 月 14 日毎日新聞夕刊特集ワイド「若者よ戦場へ行くな」

詩：なかにし礼

平和の申し子たちへ！泣きながら抵抗を始めよう

2014 年 7 月 1 日火曜日

集団的自衛権が閣議決定された

この日 日本の誇るべき

たった一つの宝物

平和憲法は粉碎された

つまり君たち若者もまた

圧殺されたのである

（中略）

若き友たちよ！

君は戦争に行つてはならない

なぜなら君は戦争に向いてないからだ

世界史上類例のない

69 年間も平和がつづいた

理想の国に生まれたんだもの

平和しか知らないんだ

平和の申し子なんだ

平和こそ君の故郷であり

生活であり存在理由なんだ

平和ぼけ？なんとでも言わしておけ

戦争なんか真っ平ごめんだ

人殺しどころか喧嘩もしたくない

たとえ国家といえども

俺の人生にかまわななくてくれ

俺は憶病なんだ

俺は弱虫なんだ

卑怯者？そうかもしれない

しかし俺は平和が好きなんだ

そのどこが悪い？

そうやって胸をはれば

なにか清々しい風が吹くじゃないか

（中略）

だから今こそ！

もったもか弱きものとして

産声をあげる赤児のように

泣きながら抵抗を始めよう

泣きながら抵抗しつづけるのだ

泣くことを一生やめてはならない

平和のために！

## 2. ジョン・ダワーの新著「忘れてしまう方法、憶えておく方法」から

### 1) ジョン・ダワー (1938年生れ、MIT 名誉教授)

戦後日本史、日米関係の研究者。ジャン・ユンカーマンの映画「日本国憲法」に登場。  
「敗北を抱きしめて」でピューリッツア賞受賞 (2000年)

### 2) ジョン・ダワーのいくつかの発言

#### ●日本における「戦争と記憶」の様々な流れ

- ① アジア解放のための「聖戦」、外部の脅威に対する「自存自衛戦争」
- ② 「東京裁判＝勝者の裁き」日本が有罪としても他の国々と同様、残酷さもどこの戦場でも同じ。「東京裁判」でのパル判事 (インド) の全員無罪意見が歴史修正主義のバイブル。パル判事の発言「アジアにおいてナチの残虐行為に比肩できるのはアメリカの原爆投下」
- ③ 日本はドイツほど悪くない。

日本にはヒトラーもナチ党もなかったし、アウシュビッツもなかった。

注) 事実としてドイツの戦争責任の追及は日本よりずっと徹底している。

戦犯の徹底追及、隣国との友好関係の構築、アメリカとの従属関係 (NATO)、

#### ④ 被害者意識とそれを乗り越える思想

66 都市の空襲、原爆投下という事実から日本人の戦争と記憶は「被害者意識」から始まった。しかし、戦死者のこの大きな犠牲を無駄にしないために彼らへの償いをどうすればいいのかという問いにいたり、「平和と民主主義を基調とする社会を創る」ことが彼らの死を無駄にしない唯一の道

#### ●被害の中の加害の例

広島被爆者の中でも在日韓国人に対する露骨な差別があった。

#### ●日本における加害者意識のあいまいさは日米共同での戦争犯罪の隠ぺいが一因

・天皇の戦争責任、・731部隊、・従軍慰安婦、・中国での化学兵器の使用

「天皇ヒロヒトは無責任と無債務の卓越した象徴であり、推進者となった。」「昭和の日」

ドイツでは考えられない。」

#### ●米、英、豪からみた日本の戦争犯罪

捕虜虐待が最大のものと見ている。(死者/全捕虜数)

ドイツ：9,348人/235,473人 (4.0%) 日本：35,756人/132,134人 (27.1%)

#### ●海外からみた日本の戦争と記憶

日本人は過去を消し去って、戦時の侵略や残虐行為は認めない国と見られている。

しかし、読売新聞世論調査 (1993年) 侵略戦争だったか：52.1% (20代 61.7%) がイエス。

#### ●日米関係に関するジョン・ダワーの見方

「日米関係が平等なことは一度もなかった。日本における米軍基地の使命は、公式には何の文書にも書かれていないが、最初から日本を戦略的に支配することだった。日本が1952年の占領終了後もアメリカに従属的である程度が普通ではないのは否定しがたい。」